

起業を目指す人、 新規事業を作る人を発掘・育成する 「TSUKI BIZ CAMP」をスタート!



梅木 悠太 (うめき ゆうた) さん

1986年月形町生まれ。大学を卒業後8年間、旭川市、富良野市の中学校で数学教諭として勤務。2018年月形町に戻り(株)山ス伊藤商店で営業の仕事に就く。2020年仲間と「つきがたdesign」という任意団体を作り、まちづくり活動に取り組んでいる。妻と6歳女の子、2歳の男の子と暮らす。

北海道に移住(U・I・Jターン)して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。25回目となる今回は、月形町でまちづくり団体を作り、行動し続けている梅木悠太さんです。

月形町にUターンしたきっかけを教えてください

10年前、27歳のころ結婚の準備などで実家に帰ることが多くなりました。そのたびに、あれ、この町寂しいなと感じていました。振り返ってみると、自分が戻ってなにか面白いことをしたらいいのではない

か?と、謎の使命感が湧いてくるのがこの時期だと思います。

当時は旭川市で中学の数学教師をしていました。担任した子どもたちを卒業させた後、次の目標が見い出せなくなり、教員としての生活を今終えてもいいかなと思立ちました。

Uターンした当時のことを覚えていますか?

ショック度が高かったのは、某月刊観光雑誌で、空知特集なのに月形町がすっぽり抜けていたことですかね。悔しいという感情が湧きました。

暮らして実感したことは、田舎特有の閉塞感へいそくかんに包ま

れているということです。外の人との交流が少ないことがその理由のひとつではないかと感じました。また、町の人が主体となって企画運営するビジネスが少ない。その結果、楽しそうな大人たちに触れられないまま育ってしまう中高校生が多くなる。なんでもかんでも行政に依存しすぎる町民が大半というのもまずい。地元に戻って、感じたのは「危機感」でした。

危機感についてもう少し聞かせてください

人口統計を見たとき2,800人しかいない町なのに毎年100人も減っていました。そして、その減り方がとても収束しそうに思えない。町なかで若い人に出会えない現実。このままでは、町として存在しきれない、残れないのではないかと。そして、町がなくなってしまう危機感を持っている人が、近くに見当たらないことが強烈に「怖い」と思いました。月形町に限らず、このままなんとなく自分の暮らす町は続くのではないかと考えている人が多い気がしますね。

まちづくりに参加するきっかけは？

地元に戻ってから、町の会議には顔を出すようにしていました。そこで知り合った40代の方に「町の会議に出ているだけじゃ何も変わらないよね…」と。自分も同じ考えを持っていたので、この言葉がまちづくりへ積極的に関わるきっかけになりました。これからの時代は、一つの事業を深めるより複数の軸をもって進むべきではないか。スペシャリストよりも、何でも屋が必要なのではないか、感覚、直感で面白そうと思うことに挑戦すべきではないか。民間の自分たちが先行して物事を進めないといけない！と、思うようになりました。

まちづくり団体の仲間はどんな人たちですか？

町役場や福祉施設、国の機関の職員などさまざまな職業の人たちで20代から40代の仲間数人で動いています。前出の「町の会議に出ているだけでは何も変わら

ないよ」と声をかけてくれた本多大輔さんが代表で、自分は副代表、会の名前は「つきがたdesign」です。

その行動の結果が「Tsukigata LABO」なのですね

はい、倉庫を改装してコミュニティスペースを作ろうとなり、2022年6月に完成しました。クラウドファンディングを実施し、100名以上の方から130万円を超える支援をいただき、半年かけて土日や仕事終わりにDIYでリノベーションしました。

この場所を作ったきっかけは、町内外問わず、ふらっと立ち寄れる“居場所づくり”が急務で、“見える何かを作ること”が、月形町の人たちに理解してもらうためにも必要だったから。この場所で挑戦するための環境作りや面白いことを実践している人との交流の機会を作っていきたいです。ここを起点として月形町や空知、北海道全体で新たな挑戦をする人が増えるエコシステムを作ろうと仲間と共に考え日々行動していきます。

2024年にスタートするプログラムがあるとか…

TSUKI BIZ CAMP（つきがたビジネスキャンプ）、ローカルでの開業・起業育成プログラムです。月形町を舞台に新しい価値創造にチャレンジする仲間を発掘・育成します。北海道大学、銀行、行政、月形町民、他地域の先輩事業者との積極的な関わりが魅力のひとつです。参加費は無料で約1か月の全日程（リアルとオンライン併用）に参加可能な10人を募集しています。実現可能な企画を提案してくださった方には、月形町や、つきがたdesignがサポートする予定なんですよ。

(2023年10月取材)

インタビュー後記

10年後のご自身やチームはどうなっていたいですか?と質問すると、「協力者をどうやって外から引っ張ってくるかが大事。まちを思って、自分で事業を起こして稼ぐ。今の自分たちよりも若い世代が中核になっていたら、月形町の活気につながるはず」と悠太さん。頼もしくて清々しくて、応援せずにはいられなくなりました。
かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表